身体性(embodiment)から見たジェスチャー、手話、言語

企　　画：	小林 春美	（東京電機大学）
	高橋 登	（大阪教育大学）
	大伴 潔	（東京学芸大学）
	田中 みどり	（女子栄養大学）
司　　会：	小林 春美	
話題提供者：	三宅 英典	（松山東雲女子大学）
	岸本 健	（聖心女子大学）
	武居 渡	（金沢大学）
指定討論者：	谷口 一美	（京都大学）

[企画主旨]

私たちは生きている限り基本的に常に環境から視覚・聴覚・触覚などの感覚情報を受け取り、自分の手足など身体を動かして空間を動き回っている。こうした身体的経験は、人間の言語・記憶など認知能力のあり方に大きな影響を及ぼすとする考え方が、認知における「身体性(Embodiment)」の概念である(Barsalou, 1999 他)。直感的には、これは納得できそうな概念と見えるが、実は言語とその発達研究においては、当然視されてきたわけではない。むしろ言語能力について伝統的には、人間が使う言語や記号は象徴性・抽象性が高く、人間の身体とは独立のものを、人間特有の優れた表象能力を利用して獲得できるようになった、とする「非身体性(Disembodiment)」の考え方も根強い。Binder and Desai（2011）は、人間が持つ感覚運動情報と概念処理の関係には、1)独立とする考え方（非身体性）、2)相互作用による接地、3)身体性の抽象化、4)不可分とする考え方（強い身体性）まで４つの異なるモデルが考えられるとした。

ジェスチャーや手話は言語の身体性を考える上で、大変有用な視点を提供すると言える。言語との関係で重要なジェスチャーとして表象的ジェスチャーがあり、対象物の方向を指し示す直示的ジェスチャーと、対象物の特徴を手の動きなどにより示す映像的ジェスチャーが含まれる。ジェスチャーはしばしば言語を伴い、単独でも使われる。手話は言語であるが、通常の直示的ジェスチャーとは異なった、言語としての特徴を持つ指さしが重要な役割を果たし、映像的ジェスチャーが影響を与えたと見られる手話単語も多く含む。いずれも感覚運動情報と概念が深く関わり、言語とも接地を持つ。

本シンポジウムは、ジェスチャーあるいは手話研究を実証的に行なっている研究者から話題提供いただき、さらに身体性の視点が重要性を増しているとされる認知言語学の専門家に議論いただくことにより、言語とその発達における身体性を考察する。

【文献】

Barsalou, L. W. (1999). Perceptual symbol system. Behavioral and Brain Sciences, 22, 577– 609.

Binder, J. R., & Desai, R. H. (2011). The neurobiology of semantic memory. Trends in Cognitive Sciences, 15, 527–536.

映像的身振りと言語発達

三宅英典（松山東雲女子大学）

映像的身振りとは，動作や事物の特徴を再現するような身振りである。例えば，手を洗うような身振りや，物の大きさや形を表すような身振りが挙げられる。このような身振りは発話内容と密接に関連しているが，言語発達とはどのような関係にあるのだろうか。

3 歳未満児の言語発達では，このような身振りが特定の意味と結びつけた表現 (ベビーサイン) として，幼児とのコミュニケーションツールとして機能するだけでなく，身振りと関連する語彙の獲得を促すことが示唆されている (Goodwyn, Acredolo, & Brown, 2000)。しかし，3 歳児以降になると，映像的身振りと語彙の発達には相関がみられていない (藤井, 1999)。Mayberry & Nicoladis (2000) は，バイリンガルの言語習得過程から，映像的身振りが，2 語発話の出現以降では語彙の発達ではなく統語論や語

用論の発達と関連していることを示唆している。

そこで，本報告では，映像的身振りと言語発達に焦点を当てた先行研究を紹介しながら，コミュニケーション能力の発達における映像的身振りの役割について議論を交える。

【文献】

藤井美保子. (1999). コミュニケーションにおける身振りの役割―発話と身振りの発達的検討―. 教育心理学研究, 47, 87-96.

Goodwyn, S. W., Acredolo, L. P., & Brown, C. A. (2000). Impact of symbolic gesturing on early language development. *Jounal of Nonverbal Behavior*, **24**, 81-103.

Mayberry, R. I., & Nicoladis, E. (2000). Gesture reflects language development: Evidence from bilingual children. *Current Directions in Psychological Science*, **9**, 192-196.

乳幼児による直示的ジェスチャーと言語発達

岸本 健（聖心女子大学）

1 歳齢頃から産出される指さしなど，乳幼児の直示的ジェスチャーは，言葉の発達の早い・遅いの予兆となり得ることが古くから指摘されてきた。一方で，乳幼児の直示的ジェスチャーがなぜ言葉の発達と結びついているのか，その理由については判然としていない。ただ，この理由の 1 つとして，乳幼児の直示的身振りに，指示した対象の名称などを周囲の養育者に言語的に答えさせる機能（質問の機能：Interrogative function）があること，そして，乳幼児が直示的ジェスチャーに備わったこの機能を利用し，効果的に言葉を学習している可能性が指摘されている（例えば Begus & Southgate, 2012）。本話題提供では，乳幼児の直示的ジェスチャーに備わった「質問の機能」について検討された実験的研究についてレビューするとともに，乳幼児が実際に周囲から言語的に答えさせるために直示的ジェスチャーを呈示していることを示した話題提供者の研究（Kishimoto, 2017）を紹介する。本話題提供を通して，なぜ乳幼児による直示的ジェスチャーが後の言語発達と関連しているのか議論したい。

【文献】

Begus, K., & Southgate, V. (2012). Infant pointing serves an interrogative function. *Developmental Science*, 15, 611-617.

Kishimoto, T. (2017). Prelinguistic gesture use in mother-infant and mother-infant-sibling interactions. *Interaction Studies*, 18, 77-94.

手話における身体性

武居 渡（金沢大学）

ここでは、ホームサインおよび手話言語の中の指さしを取り上げる。不就学のろう者が作り出すホームサインにおいて、指さしは具体物を表すだけでなく、その場にないものを表すのにも用いられ、さらに指さしそのものが語彙になる例も見られた。さらに、疑問や命令を表す文法マーカーとしても指さしが使用されていた（武居・鳥越・四日市, 1997）。このような指さしの機能拡大は、手話を獲得するろう児においても観察され、その場にないものを指さしによって表し、指さしが時間と空間を超えて使用されていた（武居・四日市, 1998）。さらに、「指さし＋手話単語＋指さし」のような発話が 1 歳を過ぎると観察されるようになる。2 回の指さしは意味的には冗長であるため、後者の指さしが主語を明示する文法マーカーになっていった（Takei and Torigoe, 2001）。指さしが手話言語に取り込まれる過程で、聴者が使う指さしとは異なる機能を担い、手話の文法を表示するマーカーとしても使用されることが明らかになった。

【文献】

武居 渡・鳥越隆士・四日市章 (1997) 離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析. 特殊教育学研究, 35(3), 33-41.

武居 渡・四日市章（1998）乳児の指さし行動の発達的変化－手話言語環境にある聾児と聴児の事例から－. 心身障害学研究，22，51-61.

Takei, W., & Torigoe, T. (2001) The Role of pointing gestures in the acquisition of Japanese Sign Language. *The Japanese Journal of Special Education*, 38(6), 51-63.